市民編集委員のページ…大内 美喜子
『南部裂織』に魅せられて

★「匠工房」

「道の駅とわだ」のすぐそばに、和風にデザインされた建物があります。平成14年に完成した「匠工房」です。匠工房「南部裂織の里」は、南部裂織保存会の皆さんの活動の場として、また市民の皆さんをはじめ県内外から訪れる観光客の体験の場として活用されています。建物の中は、広々としてゆったりと時間が流れているようです。木のぬくもりがあふれた空間に「地機」と呼ばれる織り機が60台も置かれていて、その多さに圧倒されます。

★「裂織」とは

今から200年以上前に、布を裂いて横糸「緯」にして織る一つの織り方で、全国各地また外国にもあったそうです。裂織は、布を大切にする女性の知恵から生まれたもので、古くなった着物などを捨てずに再利用します。

★「南部裂織」の歴史

寒い地方では綿を生産できなかったため、木綿の布はとても貴重なものでした。南部地方では経糸に麻糸を張り、緯には木綿を裂いて織りました。

明治26年、鉄道の開通以降本格的に木綿が入ってくるようになり、経糸にも木綿糸を使い、こたつがけや帯などを織りました。裂織の反物は農閑期の女性の現金の収入源となっていたそうです。明治後半から裂織は盛んになりました。裂織は暖かく、厚みと独特の風合いがあり、その特徴を生かしてさまざまな実用品が作られました。

しかし、時代は変わり機織りはすたれてしまいますが、現在、素朴で農家の暮らしに受け継がれてきた裂織を、もう一度よみがえらせたいと保存会のかたがたは活動しています。

★「南部裂織」の魅力

裂織は、織る人が思い思いに色やデザインを楽しみ、小さなものから大きなものまで自由に作ることができます。昔の人が糸を紡ぐことから始めて布を織り、着物に仕立てた苦労を思うと、何でも店で手に入る今の時代はつくづく便利だと思います。

しかし、裂織には夢があります。自分が考えた作品を自分の手で織ることができるのです。

★「裂織」を体験して

手芸品、工芸品を上手に作るかたがたくさんいて、公民館まつりなどでも作品が展示されています。そのような作品を見るのが好きで、いつも感心して見ていました。裂織については、地元の伝統工芸品であるということしか知らなかったので、この機会にもう少し調べてみようと思いました。

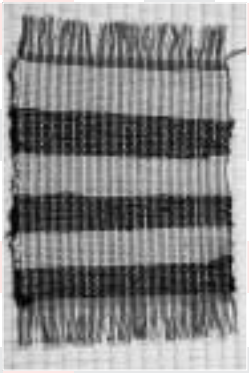
市民編集委員の大内美喜子さん（東二十二番町）

裂織を実際にやってみると、手だけではなく、足や背中も使うことが分かりました。織り機の下についている輪を足で踏み込むと経糸が上下に分かれ、そのすき間に裂いた布を通して木の板でトントンと押します。そのとき、背中を少し後ろに倒すようにすると経糸がピンと張るので、きれいに織れるそうです。最初は、手や足を順番通り動かすのが難しく思いましたが、布ができていくとうれしくなり、何度も同じ作業を繰り返すのにも慣れてきます。途中、工房のかたにすすめられて緯の色を変えてみると、また違った感じの布が織れてきます。

横糸となる緯を古い布を裂いて作り、玉にする

裂織は、ただの古い布が別の布に生まれ変わります。約1時間ほどで織り上がり、仕上げを工房のかたにお願いすると小さな敷き物ができました。裂織教室の生徒さんは、こたつ掛けを織ったりするそうですが、完成するまでにはどれほどの時間と根気が要るのだろうと思うと気が遠くなります。でも、自分の手でじっくり作り上げていくのが楽しいから織るのではないかと思いました。

皆さんも、思い思いの裂織を作ってみてはいかがですか。


出来上がった敷き物

匠工房（☎⑳8700）